子どもの教え合いを支える保育者の認知

保育者養成課程学生との比較

小川 絢子

(名古屋短期大学保育科)

キーワード：見守り，幼児，保育者

Understanding of the preschooler's teaching activities by children workers

Ayako OGAWA

(Nagoya College Department of Preschool Education)

Key Words: inhibitive teaching, preschool children, children workers

目 的

幼児期後期は、子どもどうしの教え合いの活動が多くみられるようになる時期であるとともに、時には他者に対して「教えないで見守る」よう自分の行為を調整することが求められる。しかしながら、子どもが協力して活動するために行う他者の心的状態への配慮や行為の調整は、幼児期後期の子どもにとって、子どもたちだけで対処することが難しい場合も多い。したがって、子どもの教え合いは、保育者がいかに子どもの状態を認知し働きかけのかが重要な問題となる。そのため、保育者が子どもの教え合いをどのように認知しているかを明らかにし、子どもの「協同的な経験」にとって効果的な保育者の働きかけを検討していくことが必要である。

本研究では、幼児期後期の子どもどうしの教え合いを保育者がどのように認知しているかについて、保育者養成課程の学生の認知と比較した。特に、「教える」という力だけでなく、「学び手のためにあえて待つ、見守る」といった抑制的な力を、保育者や学生がどのように認知しているかに焦点を当てた。

方 法

参加者：愛知県内の短期大学保育者養成課程に在籍中の学生 17 名（平均年齢 19.59 歳）、および広島県内の私立保育園に勤務する保育士 13 名（平均年齢 36.70 歳、勤務平均年数 13.23 年、勤務年数範囲 7 年～25 年）を対象に質問紙調査を実施した。学生は、3 週間の保育所実習と 3 週間の幼稚園実習の経験があった。

材料：質問紙には、2 人の登場人物からなる仮想場面が含まれた。仮想場面は、学び手である登場人物が紙飛行機を折っている場面、パズルをしている場面の 2 種類のストーリーをそれぞれ 3 枚の線画で表したものをを用いた。いずれの場面でも、学び手である登場人物は遊びの完成のさせ方を知らず、遊び始めからそばにいるもう 1 人の人物がその方法を知っているという状況であった。ストーリーの最後に、欲求明示条件では、学び手が「自分でできるようになりたい」と言い、欲求明示なし条件にはその一言はなく、課題が徐々にできつつあることだけが記してあった。

手続き：参加者は、登場人物である年中児（4 歳児）の行為を推測する質問紙か、年長児（5 歳児）の行為を推測する質問紙のいずれかに回答した。参加者は、該当する年齢の子どもを想像しながら質問紙の回答にあたった。どちらの質問紙でも、まず始めに欲求明示なしの仮想場面を読んだ上で質問に回答し、その後欲求明示の仮想場面に進んだ。質問は、遊びの完成のさせ方を知らない登場人物に、(1) そばにいる登場人物が「教える」とするか、「教えないで見てくれる」とするか、(2) そばにいる登場人物は「教えた方がよい」とするか、「教えないで見てくれる方がよい」とするかというものであった。

結 果

遊びの完成のさせ方を知らない学び手に、幼児はどのような教示行為を行うと予測するか、また、保育に携わる参加者の視点から、幼児にどのような教示行為を期待するのか、学び手の欲求明示の有無にもついて検討した。

幼児の教示行為について参加者に予測させたところ、学生も保育者も幼児の年齢、欲求明示の有無に関わらずに、子どもは「教える」と考えていた。一方、幼児に対する期待について χ^2 検定を行った結果、幼児の年齢に関係なく、欲求明示なし条件において、学生では「教える方がよい」の回答が、保育者では「教えないで見てくれる方がよい」の回答が有意に多かった。(4 歳児: $\chi^2(1)=4.893, p<.05$, 5 歳児: $\chi^2(1)=4.978, p<.05$)。欲求明示条件では、学生も保育者も「教えないで見てくれる方がよい」と回答していた。

図 1 幼児に期待する教示行為 (左: 学生, 右: 保育者)

考 察

本研究の結果より、学び手の「自分でできるようになりたい」という欲求が明確であっても（欲求明示条件）、幼児期後期の子ども（4 歳児および 5 歳児）は学び手に教えるだろうと、保育者や学生は認知していた。また、欲求明示条件において保育者らが子どもに期待している行為は、保育者でも学生でも「教えないで見てくれる」というものであることから、保育者らが子どもの教示行為に対して持っている認知と子どもに期待する行為は異なることが明らかになった。

また、特筆すべき結果は、欲求明示なし条件において、子どもの教示行為への期待が保育者と学生の間で大きく異なっていた点である。つまり、学生は子どもに「教える方がよい」と期待していたのに対して、保育者は「教えないで見てくれる方がよい」と期待していたことが明らかとなった。

このことは、保育者が、「教えないで見守る」ことの重要性を日々の子どもの教え合いの場を観察する中で実感しているからであるといえる。保育者たちは、学び手が自分自身の力でやり抜くこと、また子どもが常に学び手に教示行為を行うのではなく、相手の状態に合わせて、時には教えないで見守ることの重要性に気づいていると考えられる。